

茨木ある記

川端通り・桜通り界隈のオブジェ、モニュメント見て歩き<前編>

茨木市の中心部を北から南へ走る元茨木川の緑地帯、高橋を境に北半分は川端通り、南半分が桜通りと名付けられています。これらの通りに沿った界隈を歩くと、文化都市茨木の一面が浮かび上がってきます。歩きなれた道も、ちょっと視点を変えると新しい発見があります。急ぎ足で歩いていると見過ごしてしまうようなオブジェやモニュメントなどゆっくり観賞しながら歩いてみました。

怖い鬼も、今では市民のマスコット

中条図書館の東側に「茨木童子像」があります。今回、ここを集合場所にしました。すぐそばには、茨木童子が川に映る自分の姿をみつめたという「貌見橋」を模した石橋があります。また、茨木高校東門前（新庄町）には民話の舞台となった場所として「茨木童子貌見橋碑」があるということです。この童子像は通りに馴染んでいるため、意識しないと気付かずに通り過ぎてしまうかも知れません。これは茨木青年会議所が、郷土の埋もれた伝統文化を掘り起し、それを顕彰することによって、市

民の皆さんに故郷を再発見していただくという趣旨で制作し、市に寄贈（1990年）したものです。原画は市民からの公募によって採用されました。鬼とはいえ、腕白小僧のような表情に親しみが感じられます。茨木童子の由来を読むとちょっとおぞましく感じられますが、絵本などによると、親孝行だったとの後日談もあり、ホッとします。今では市の観光大使として、商店街の看板やパンフレットなどに使われ、町おこしに大活躍です。



茨木童子

国内外の都市と友好の輪

消防署の交差点を北へ渡ると市役所前の中央公園南グランドです。その一角に、「日中友好の碑」があります。中華人民共和国安慶市と茨木市が友好都市となった（1985年締結）のを記念したものです。碑のそばには、両市の安寧を祈るように唐獅子像が一對建っています。隣り合うようにアメリカ合衆国ミネアポリス市との友好（1980年提携）を記念した碑もありま

した。また、その近くには小豆島町と姉妹都市となった（1988年提携）記念碑とあわせてオリーブの木が植えられています。これら姉妹・友好都市とは、文化、スポーツ等を通じて、市民レベルで交流の輪を広げています。



日中友好唐獅子像

絵や彫刻などが楽しめる野外ギャラリー

南グランド南東側の信号を東に渡ったところに、樹木に囲まれて男の子と女の子が向き合っている像があります。以前は、茨木高校の北側、元茨木川左岸の辺りを寺町といい、ここに架けられていた橋を寺町橋と呼んでいました。茨木川の公園緑地化にともない、なくなった橋跡を記念して建てられたものです。

学生の絵が陶板画にして飾られていました。それらに並んで、幕末の頃の「高橋」付近の様子を描いた作品がありました。茨木川を筏で下る人なども描かれています。

石庭風の通路を登りきると、茨木神社側に「希望の像」があります。少年と少女が空を見上げ、少女は鳩を抱き、少年の高く上げた右手には鳩がとまっていて、今まさに羽ばたこうとしています。1979年に茨木ロータリークラブが設立5周年記念として寄贈したものです。このあたりの道の両脇には、「老人クラブ連合会」、「ボーイスカウト」、「ラジオ体操」など、いくつもの周年記念植樹の標識が立っています。地域に根差した市民活動が盛んな証として、次々と桜の木が増えてきています。

北へ進むとオブジェがいくつかあります。市政30



寺町橋跡



陶板画(幕末のころの「高橋」付近)



陶板画(小学生の作品)



「希望の像」



「祖石」
H. HIRANO 作



「変様一空へ」
林宰久作



「VISIONARY-流体」
松本薫作



「友愛の鐘」
仲真弘・平清作



「友愛の像出会い<ON MEETING>」
木村光佑作



「希望の泉」
木村光佑作



「結び」
仲真弘・平清作

周年（1978年）を記念した「祖石」という作品には、H. HIRANOと作者名が刻まれています。四角の石の上に球形の石が乗っていて、何か意味ありげです。さらに北へ行くと、スチール製の直方体と立方体を組み合わせた現代アート「変様一空へ」（2010年）があります。林宰久さんの作です。川端通りから横にそれて、納税協会の信号を西に渡るとクリエイティブセンターが見えます。その前庭にスチール製の流れるようなフォルムのオブジェが立っています。松本薫作「VISIONARY-流体」（1992年）です。その近くには、時計と鐘を組み合わせた「友愛の鐘」があります。また、北グランドの南側には美術協会会長の木村光佑さんの作品で、ライオンズクラブが寄贈した「友愛の像 出会い <ON MEETING>」（1987年）があります。市内で発掘された銅鐸をアレンジして、人と人の出会いと対話を表現しています。近くには同じく木村さん作の「希望の泉」もあります。

川端通りをさらに北へ

川端通りに戻ります。樹木の生い茂る小道を北へ、丹波橋をくぐって行くと、左手に道路愛称モニュメント「空の方へ」が立っています。幾何学模様を基調にしたカラフルな造形物です。これも木村光佑さんのデザインです。さらに、上中条青少年センターあたりに石を加工して作った「結び」（1985年）という作品があります。これは、造形美術家・仲真弘さんと石匠・平清さんによるもので、水引をモチーフにしています。人と人、道と道、町と町などを結びつける絆を象徴しているようにも見えます。

様々な美術作品を見たあと緑に囲まれた川端通りを北に向かって行きます。JRの高架を抜け、「田中橋跡」の石碑のある交差点を越えて茨木川に突き当たると、今度は大きな「安威川・茨木川合流の碑」（1985年）が建てられています。石碑の裏面には、茨木川付け替え工事についての説明があります。それによると、元の茨木川は山地部から中央部を安威川と並行して貫流し、三宅村で合流していました。昔は、川幅が狭いうえ天井川で、しかも堤防が軟弱だったため、一度洪水にあうと破堤

崩壊して、度々洪水に見舞われてきました。そこで、昭和10年の水害の折、沿川の町村が国と府に河川改修の陳情書を提出したそうです。その結果として、昭和16年、茨木川は田中町先で安威川に合流され、現在の姿になりました。合流点以南は昭和24年廃川となり、元茨木川緑地として整備されました。昔から度々洪水に悩み、懸命に対応してきた先人たちの労苦に感謝し、このことを後世に引き継ぐために碑を建立したと記されています。せっかくだからと川の合流地点まで足を延ばしてみました。水量の多い二つの川の合流地点は強固なコンクリートで守られていて迫力があります。さて、今回は桜通りをテーマにゆっくり歩いてみたいと思います。お楽しみに。

合流地点(左 安威川、右 茨木川)



説話・茨木童子

いくつかの説があるようですが、撰津説によれば、茨木童子は水尾村で生まれ、幼児期に茨木村のはずれに捨てられ、近くの床屋に拾われて育てられました。そして、床屋の手伝いをしているうちに客の切り傷の血をなめ、その味を知ってからは、わざと傷をつけて血をなめることが習癖になりました。自分でも異常に思った童子は、前の小川にかかる橋の上から水に映る自分の顔を見ました。すると、それがすごい鬼の形相であることを知り、人間世界での生活をあきらめ、大江山に住む山賊の頭、酒呑童子の手下になりました。